

科学研究費補助金（特別推進研究）研究進捗評価

課題番号	18002007	研究期間	平成18年度～平成22年度
研究課題名	高度言語理解のための意味・知識処理の基盤技術に関する研究		
研究代表者名 (所属・職)	辻井 潤一（東京大学・大学院情報学環・教授）		

【平成21年度 研究進捗評価結果】

該当欄		評価基準
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（評価意見）

本研究課題では、高度言語理解のために機械学習を利用した自然言語処理技術、大規模言語資源の開発、大規模分散並列計算環境の整備を並列して進めているが、それぞれ研究成果が順調に得られている。特に、構文解析技術及び機械学習の応用については非常に高い成果をあげ、本研究グループの先導性を明確に示すものとなった。

また、生命科学を応用領域として構築している大規模言語資源は日本発信の情報資源として誇れる成果である。さらに、それぞれの研究成果の統合も円滑に行われ、当初の目標に向けて順調に研究が進展し、期待どおりの成果が見込まれる。

今後は本研究終了後の高度言語理解の研究の在り方も視野に入れて、研究を推進してもらいたい。

【平成23年度 検証結果】

検証結果	研究進捗評価結果どおりの研究成果が達成された。
A	<p>当初の研究目的である理論言語学及び機械学習を利用した高度な自然言語処理システムの構築、生命科学分野の大規模言語資源である GENIA コーパスの構築と公開、言語処理のための大規模分散並列計算機環境の構築の、いずれも予定どおり達成した。特に、高度な自然言語処理システムに関しては、独創的な手法により非常に高い研究成果を挙げ、本研究グループの先導性を明確に示すものとなった。また、GENIA コーパスは日本発信の情報資源として誇れる研究成果であり、既に国際的に認知され利用されている。言語処理のための計算機環境についても、国際的にトップレベルの研究成果を挙げた。さらにそれぞれの研究成果の統合も円滑に行われ、当初の目標を十分に達成したと判断できる。</p> <p>これらの研究成果は既に国内外の多くの研究者により継承されており、本プロジェクトは自然言語処理分野において大きな意義を持つものとなった。</p>